ことなかるべきを信ずるなり。（信濃田年秀評）

枯草

野口雨情著

發行所は水戸の高木知新堂といふ書林。代價は十六錢、體裁は雅致ある袖珍の書物、ページは五二頁。『毒も罪も』以下十七篇、悉く青年詩人たる著者の詩想より溢れ出たる小さい新體詩集なり。題して「花も實もなき枯草の一篇、わか親愛なる諸兄に捧ぐ」とあり。

僕には一向此方面の眼がないので、事々しく批評などする事が出來ぬが、これについて聊か他と趣を異にすると思はれる節は、一体この種の文學には星や菫や、ハートなどがつき物であるけれども全篇通じて夫か見當らぬ。從つて咏じた品物には餘り突飛なハイカラが見えぬ、夫に、言葉に面白い俗調を交ぜて其調和が割合甘く行つて居る。面白いのを一つ出して紹介して置きませう。

雛祭りする九歳の
桃の花、桃のはな
去歳もことしも
物めしまさぬ
日は永くして雛檪の
夜は短かくて桃の花
ある夜雛壇灯は消えて
幾ともからは忍び來ぬ
雛さまの雛さまの
緋桃の花はちりけりと
お竹は又も思いけり
雛さまと何語る、
一昨年も
やさしさよ。」
欠伸にくるゝ三ヶ日
ねむた顔なる春の宵」
幼きものゝと子鼠の
されとも家人は知らでありき。」
鼻かおられて哀れなり
次の朝下婢あはて告げぬ」
この道に心ある人ならば御覽じて宜しいでせう

（日向志）

明治の家庭　第一卷第號

家庭の爲めの雜誌がいろ〳〵出るといふのは、兎に角惡るい現象とはいへぬ。これは岸那福雄君の編輯せられる雜誌で、近頃やつと產聲を上げたのであります。題號でも知れる通り一般の家庭雜誌